



←
旧海軍倉庫
大正時代の建物は、現在でも梶井関農
機が倉庫として利用している。

霞ヶ浦(その4)～霞ヶ浦海軍航空隊～

ライト兄弟の発明した飛行機、第一次世界大戦で大きな進歩を遂げ、戦後も飛行機の改良が進みました。飛行機の重要性を認識した日本海軍も稲敷郡阿見村(現阿見町)に霞ヶ浦海軍航空隊を設立し、飛行機の訓練に着手しました。そのため霞ヶ浦は海軍航空揺籃(ようらん…ゆりかごの意)の地となりました。

霞ヶ浦海軍航空隊

アメリカのライト兄弟が世界で初めて動力飛行に成功したのが1903(明治36)年。兄弟は1908(明治41)年頃、ヨーロッパ各地で航空ショーを催して資金を蓄え、後にアメリカンライト飛行機製作所を設立しました。このように当初、飛行機は興行用として使われていたが、これにまずアメリカ軍が着目し、偵察用として飛行機の製作に乗り出しました。以後、ヨーロッパ各国でも開発に着手し、開発競争が激化、1914(大正3)年に始まった第一次世界大戦には、様々な飛行機が登場してきました。始めは偵察、砲弾の観測に使われていたが、爆撃機や機関銃で武装した戦闘機も作られ、飛行機は戦略上重要な兵器であるとの認識が深まってきました。

日本では1904(明治37)年に始まった日露戦争での旅順港封鎖時、旅順港内を空から偵察することの必要性が海軍航空隊創設の動機となりました。帝国海軍は1912(明治45)年6月「海軍航空術研究委員会」を設置、神奈川県横須賀の追浜に「航空技術研究所」を設立し、1912(大正元)年、米仏から輸入した2機を使用して、追浜飛行場で操縦訓練を開始しました。

1914(大正3)年8月、第一次世界大戦が勃発すると、日英同盟に基づいて、日本はドイツに宣戦布告。日本軍は、ドイツの膠州湾租借地と山東半島の青島を包囲しました。包囲戦途中の9月初めには、モリス・ファルマンの水上機がドイツ軍占領地や船舶に対して帝国海

軍最初の航空攻撃を実行しました(青島の戦いが終結するまでに航空機は50回出撃し、200発の爆弾を投下しています)。

1916(大正5)年4月1日、「航空術研究委員会」は発展的解消を遂げ、航空教育機関として帝国海軍最初の航空隊である「横須賀海軍航空隊」が誕生しました(帝国陸軍は、1915(大正4)年12月10日に、常設最初の飛行部隊として、陸軍所沢飛行場に航空大隊を編成しています)。さらに航空機が次世代戦争において中心的役割を担うと感じた海軍は、本格的訓練のために水上機基地だけではなく陸上飛行場を持つべきだと考え、訓練適地を探し始め、陸上機と水上機の両方の訓練が可能で、余り人家もなく、飛行場としてすぐ展開できる阿見原と霞ヶ浦が最適地として選ばれることになりました。

1920(大正9)年3月、阿見原の原野と霞ヶ浦湖畔合わせて約85万坪(280万坪)を海軍省が買収、整地・湖岸の埋め立てが行われ、霞ヶ浦飛行場が完成し、翌1921(大正10)年6月、阿見原に「臨時海軍航空術講習部」(阿見原に陸上機、青宿地区の湖畔に水上機が設けられました)が発足しました。7月22日には華やかな飛行場開きが行われ、大勢の人々が押し寄せました。その開場式の様子を『霞空十年史』では、「大正10年7月22日、霞ヶ浦飛行場開場式。阿見村は勿論、近郷近在の老若男女、実に5万人が空の妙技を見ようと朝がまだあけきらぬうちからつめかけ、1年前、狐

狸の棲家だった阿見原は人で埋まった。アプロ陸上機3機の編隊飛行、特殊飛行、センピル教育団落下傘主任オードリース少佐の落下傘降下に一同賛嘆惜しむところを知らなかった。」と伝えています。

この霞ヶ浦飛行場は当時としては東洋一といわれ、航空機の発達にともない世界一周競争が起こり、海外から飛来する航空機の離着陸場ともなっていました。もちろん本来の目的である飛行機の操縦教育もすぐさま開始されています。当時、日本の航空技術は欧米諸国から約10年は遅れており、海軍は日英同盟の縁でイギリス軍の飛行教官団を招聘しました。イギリスは、ウィリアム・フォーブス・センピル大佐を団長に、29人の指導員を日本に派遣してくれました。彼らは、1921(大正10)年の春から夏にかけて霞ヶ浦に順次到着、9月5日には、センピル大佐以下の教育団が正式着任し、航空技術の教育が開始されました。教育はグロスタースパローホーク艦上戦闘機やソップピースクーター単座雷撃機・スーパーマリンシールズ水陸両用飛行艇など、日本の依頼で購入し、イギリスから持ち込んだ100機ほどの新型航空機を使って、操縦と射撃、偵察、爆撃、雷撃などの訓練が行われました。イギリスにおける航空母艦「アーガス」や「ハーミーズ」の計画についての情報ももたらされ、建造の最終段階にあった空母「鳳翔」の参考とされました。

講習を受けた学生たちは海軍部内の多くの操縦適任者から厳選された若者

であり、過去に操縦経験をもつ者、外国留学から帰国した者も含まれ、極めて優秀な学生たちでした。彼らは後に後輩を指導する立場に立つため受講態度は真剣そのものでした。この講習員の中には、後に特攻隊の生みの親として有名になった大西瀧治郎や13代霞ヶ浦航空隊司令千田貞敏、第50航空戦隊司令酒巻宗孝、第3航空艦隊長官吉良俊一などの若き大尉たちがいました。

センピル大佐

センピル大佐は、スコットランドの出身で、1893（明治26）年の生まれで、阿見出身で土浦中学12回卒の作家下村千秋と同じ年です。イトトン校卒業後、中央飛行学校を経て、陸軍に入り、航空隊の指揮官（将校）となり、第1次世界大戦では、戦闘機乗りとして活躍、その戦功により若くして大佐に昇進、男爵にも叙せられ、貴族となりました。教育団長として来日した時は28才、指導方針は厳格で、間違えると容赦なく叱責しましたが、教えたとおりでできれば明るく笑顔で喜ぶ人でした。教官たちは飛行場近くの海軍宿舎に入居しましたが、大佐は、新婚の奥様と一緒にいたので、現土浦四中近くの土浦町中高津に家を借りて住んでいました。飛行場へは当時珍しかった自動車を使用され、朝夕の通勤には運転手が雇われていましたが、大佐は自分でも運転ができるので、夫人を乗せて近くの散策によく出かけていました。このセンピル夫妻がお気に入りであったのが料亭「霞月楼」の二代目女将堀越満寿子。「霞月楼」には、帰国後、センピル

夫人から「カゲツママサン」（夫人は二代目女将満寿子をこう呼んでいました）に贈られた夫人のポートレートや二代目女将満寿子や芸者衆と、和服姿で記念写真に納まるセンピル大佐とセンピル夫人の写真が残されています。



霞月楼での記念写真

左端の立ち姿がテンピル大佐、中央がテンピル夫人で後列左が満寿子女将

1921（大正10）年当時、小学校2年生であった中31回の保立俊一氏は航空隊水上班の様子を、『水郷つちうら回想』（筑波書林 1994（平成6）年刊）の「航空隊の出来た頃」の章で次のように述べています。

「小学校2年生のある日、近所の友だちと2人で阿見の航空隊へ行ってみることにした。学校が終わってすぐ出発した。・・・（桜川を渡り、小松から大岩田を経て青宿に着くと）目の前の田圃の中に格納庫が大きく見えた。・・・。小さな流れに沿ったあぜ道を行くと大きなテント張りの格納庫の前へたどり着くことが出来た。大きな飛行機が2機

ならんでいる。戸も何もない飛行機を入れておくにすぎない布テントであり、子どもでも自由に入ることが出来た。もううす暗くなったテントの中の大きな飛行機は、あとで写真を見、説明文を見ると、イギリスのスーパーマリンシールス水陸両用機であった。その時は何もわからないまま、飛行機とは大きいもんだな！と思いい、胴体や胴体に直接着いている車輪にさわったり、黒光りする十字型のプロペラ、銀色の2枚の主翼を見上げ満足した。

私達が飛行機にさわったり、まわりをまわって見上げたりしばらく時間を過ごしたがその間だれも来なかった。兵隊の姿も見なかった。霞ヶ浦に沿って一棟の兵舎と数張りの布テントの格納庫がある、これが水上班であった。しばらくして、2人は帰途についた。もううす暗くなった道を急ぎ足で歩いた。柿の木橋（霞ヶ浦高校横を流れる花室川に架かる橋）の処まで来た時うしろから自動車がある。まだ自動車の珍しかった時代である。イギリスの将校を乗せた車は私達を追い越して止まった。こども2人暗くなった田舎道を歩いているのをおかし

いと思ったのである。同乗していた日本の海軍さんに、「お前達どこへ行くんだ」と声をかけられた。土浦から飛行機を見に来たことを云うと「もうおそいから車に乗せていってやろう」と乗せてくれた。黒塗りのオープンカーのライトにてらされて白く光る道を車はアツという間に小松に着いた。高津に行くという車から降りて小松からは田圃道をたど

っていると、桜川の方から提灯の火が近づいた。私の家の名が入った提灯を見て疲れがどっと出た。店の者がさがしに来たのである。小学2年生の冒険は終わった。」

センピル教育団による講習は1921（大正10）年9月から翌年10月まで行われ、日本海軍航空隊の技術は大きく前進しました。1922（大正11）年11月にセンピル大佐は講習の任務を終了し、勲三等を賜り、大部分の人員をつれて帰国しました。これに伴って臨時海軍航空術講習部は廃止され、1922（大正11）年11月1日には、「横須賀海軍航空隊」から「霞ヶ浦海軍航空隊」が独立、開隊し、現在の茨城大学農学部・阿見町役場・阿見第二小学校・阿見中学校・陸上自衛隊霞ヶ浦駐屯地周辺に霞ヶ浦海軍航空隊陸上班が、現在の陸上自衛隊武器学校の地に霞ヶ浦海軍航空隊水上班が設置され、水上、陸上、艦上、研究機、練習部と航空要員の錬成が始まり、特に幹部養成に重点がおかれていました。



旧霞ヶ浦海軍航空隊正門

現在、阿見小学校の正門として使われている大谷石の門柱

参考資料

「阿見と予科練」阿見町教育委員会刊（高21回 松井泰寿）